

ヘリテージマネージャーは何をするのか

ひょうごヘリテージ機構H²O
代表世話人 津枝 勝見

2001年度（正確には2002年1月）に兵庫県でヘリテージマネージャーの養成講習会が始まってから20年が経過しました。

この間、養成講習会の開催地は全国に広がり、ヘリテージマネージャーという言葉も少しずつ知られるようになってきました。まだまだ一般に浸透しているとは言えませんが、政府の文書にも書かれるようになり、社会の中で一定の評価がなされ、活動の意義が認められつつあるようです。

このヘリテージマネージャーという言葉について、ヘリテージは文化遺産、マネージャー／マネジメントを経営、運営（する人）と訳して考えれば、なんとなくイメージが湧き、既に確立された活動内容やそれに向けての講習分野があつて、それを学んで実践していくだけだという印象を持たれる方があるかもしれません。

しかし、ヘリテージマネージャーの先輩方がご承知のように、この言葉は、阪神淡路大震災の教訓を受けた兵庫県で、講習会を始めるにあたって生み出された言葉です。震災によって多くのものが失われた経験を踏まえて、これを防ぐための防災の必要性は言うに及ばず、震災で露わになった多くのものへの対策が急務と思われました。災害は、それまでの社会の中で普段からできていなかったことを顕在化するものです。そこで、震災によって見えてきた、社会に欠けていたもの、不足していたものの穴を埋め、良くしていく、そのために何ができるか、何をしなければならないか、と考えた中で、生み出されてきたのがヘリテージマネージャーという言葉であり、活動分野だったのだと思います。

この意味で、今ヘリテージマネージャーとしてなんとなく形作られているイメージにとらわれることなく、広い視野をもって、社会に必要とされているものの穴を埋め、試行錯誤しながら、新たな時代を切り開く活動を実践していくというのが、兵庫でヘリテージマネージャー講習を受け、活動をする醍醐味であり、矜持なのではないかと思います。

折しも新型コロナ禍を受けて社会のさまざまな仕組が大きく変わってしまった今、さらに新たな動きが求められることになりましたが、相変わらず試行錯誤を重ねながら進んでいく、兵庫県ヘリテージマネージャーの活動に大いに期待していただきたいと思っています。